

令和8年3月1日（日）

厳しかった冬の寒さも日ごと和らぎ、校内の木々も新たに巡り来る春を迎えるかのよう  
に枝を広げ、木の芽を膨らませた今日の佳き日、PTA 会長進藤誠様、同窓会長井原和  
彦様、愛媛県議会議員石川剛様、四国中央市長大西賢治様をはじめ、御来賓並びに保護者  
の御臨席を賜り、令和七年度愛媛県立川之江高等学校全日制課程第七十七回卒業証書授与  
式が挙行できますことは、卒業生をはじめ在校生並びに教職員一同の大きな喜びであり、  
厚く御礼申し上げます。

ただ今、めでたく卒業証書を授与された百六十一名の皆さん、御卒業おめでとうござ  
います。本校における三年間の修学に対して重ねてきた皆さんの努力に敬意を表するところ  
であります。また、この日を待ち望んでこられました保護者の皆様に対しまして、心よ  
りお喜びを申し上げます。入学を許可しました私自身にとりましても、この川之江高校で  
三年間、同じ時を過ごした皆さんの立派に成長した姿をこの場から見ることができ、うれ  
しい気持ちで一杯です。

振り返りますと、皆さんの入学後、コロナ禍以前の落ち着きもみられるようになり、  
校内各所で明るい声や笑顔にふれることができました。また、日々の授業はもちろんのこと、  
学校行事、部活動、さらには校外での活動や各種大会における皆さんの活躍には目を見張  
るものがありました。入学した年には、灼熱の太陽のもと、紫一色に染めあげられた  
甲子園球場のアルプススタンドで多くの同窓生や地域の方々と心を一つにして川之江高  
校の名を連呼したことが思い出されます。こういった経験を重ねることで、皆さんの心の中  
には、コロナ禍以前の家庭生活や学校生活が当たり前ではなく、ありがたいことだった  
ということに気付くとともに日々の何気ない生活に感謝する気持ちがより強まったので  
はないでしょうか。この気付きは皆さんの今後の人生にとってもプラスになったと私は考  
えています。皆さんの高校生活が充実したものとなり、かけがえのない思い出を心に刻む  
機会が増えたことは我々教職員にとっても幸せなことでした。

さて、三年前の入学にあたり、緊張した面持ちの皆さんに私からお話しした「明るい  
気持ち」について、再度、その内容を紹介したいと思います。

「人は明るい気持ちでいると、笑顔になります。笑顔でいれば、自然と明るい気持ち  
なれます。表情が明るくなれば、暗く沈みがちな気持ちも変わり始めます。自分が変われ  
ば、周囲の人たちの受け取り方も変わります。少なくとも、物事が今よりもいい方向に動  
き始めます。物事がいい方向に動き始めれば、人生が楽しくなって、笑顔でいられる日  
が続くことになります。」

皆さんの中には、もしかすると生まれつきの性格は変えられないと思っている人が

いるかもしれませんが、そんなことはありません。気持ちが明るくなったり、暗くなったりするのは、全て自分自身の主観、つまり自分だけのものの見方や感じ方の問題なのです。考え方や見方ひとつで、物事の受け止め方を変えることができるのです。

笑顔の効果については、「笑顔でいることで気持ちに余裕が生まれ、リラックスして日常を過ごすことで、自然と疲れやストレスを蓄積しにくくなり、何事に対してもやる気生まれ、前向きな姿勢で物事に向き合えることから、いい結果が出やすい、あいさつや会話の際に笑顔でいると、相手に心を開いているというサインになり、相手もリラックスできることから、お互いの心理的な距離を素早く縮めることができる」といわれています。

では、明るい気持ちを引き出すにはどうしたらいいのでしょうか。「何に対してもいい部分やプラス面を探してみる、今日がダメでも、明日もダメとは限らないと考える、不安や怒り、焦りなどのネガティブな感情は仕方がないと受け入れる、ダメなものはダメと割り切って次善の策を考えてみる、パーフェクトな自分を求めない。つまり、百点満点でなければ、0点でも同じという妥協を許さない極端な完全主義は生きづらくなるので排除する」ということです。

話は変わりますが、世界的な偉人として讃えられ、目も見えず、耳も聞こえず、そのために話すことも困難だったヘレン・ケラーが人生の目標とし、その生き方を尊敬していた人物が江戸時代後期に活躍した塙保己一という人物です。ヘレン・ケラーが来日した時に語った言葉を紹介します。

「私は特別な思いを持って、日本にやってまいりました。つらく苦しい時でも、塙保己一先生を目標に頑張ることができ、今の私があるからです。」

塙保己一とはどのような人物だったのでしょうか。彼は、七歳の時、病気で失明し、失意の日々を送ることになります。しかし、幼い頃から学問が好きで、自分にできることを突き詰めようと猛勉強を始め、三十四歳の時、「学問をしたい人は誰でも、いつでも、どこでも必要な書物が読めるようにしてあげたい。日本に古くから伝えられている記録や史料を集めて次の世代に伝えていきたい。これこそ自分に与えられた使命だ」と志を立て、四十一年かけて編纂・刊行したのが、六百六十六冊からなる『群書類従』という書物です。

では、目が見えない塙保己一はどのようにして、この『群書類従』をまとめたのでしょうか。彼は、古代から江戸時代初期までの約千年間に書かれた書物や史料を人に読んでもらい、それを記憶していき、その上で分類、整理するとともに、現代のような印刷技術がないこの時代に多くの人がこの書物を手にできるように、一万七千二百四十四枚の版木に彫り、印刷できるようにしました。ここで皆さんに伝えたかったのは、人間の可能性の大きさです。幼い頃から目が見えず、困難に直面しても、努力をすれば自分の志、夢、目標を追求することができるということです。

今後、社会に出ると、今まで以上に辛いことや大変なことにその行く手を阻まれることがあるかもしれません。そのような時にこそ、「笑顔」を意識することで、自然と明るい気持ちになり、暗く沈みがちな気持ちも変わり始め、物事が今よりもいい方向に動き始めるはずです。その上で、「夢」や「希望」、自らの「信念」を持って、周囲に惑わされることなく、自分の信じた道を進んでいく、そして、新しいことにチャレンジしたり、一歩前に踏み出すということを常に心に留め、これからの人生を送ってほしいと思っています。

この川之江の地に生をうけた朱子学者の尾藤二洲も「志の一事は自心に問て決すべし」と志や自らの信念を持って前に踏み出すことの大切さを示してくれています。このような思いを持って皆さんが今後の人生に挑んでいくことが、今まで皆さんの成長を支えていただいた保護者の皆様にとっても、皆さんと関わってきた我々教職員、そして、皆さんの力を待ち望んでいる地域社会にとって、この上のない喜びとなるはずです。

卒業生の皆さんにとって、この川之江高校は「母校」であり、心の拠り所としての「ふるさと」です。皆さんの成長に大きく関わった「母校」を、「ふるさと」を大切に思うとともに自分自身の人生をしっかりと見つめて前向きな気持ちで歩みを進めてほしいと思っています。現代社会は予測困難な時代の途にあり、皆さんが歩むこれからの道は決して平坦なものばかりではありません。時に高い壁に行く手を阻まれるなど、閉塞感にさいなまれることもあるでしょう。しかし、「夢や希望、好奇心、チャレンジする気持ち」を持ってたくましく、前向きに歩むことで、それらの壁を乗り越えることができるはずです。

結びになりますが、保護者の皆様、お子様が心身ともにたくましく成長し、本校を卒業していく姿を目のあたりにして、様々な思い出に万感胸に迫るものがあることと存じます。お子様たちは、一人一人がこの三年間で大きく成長してくれました。これからも皆様の御期待に応えてくれるものと確信しております。

卒業生の皆さん、いよいよ旅立ちの時がやってきました。これからは、皆さん自身が、今まで支え、育ててもらったふるさと・地域社会の一員として、後進を支えていく側に立ちます。今後は本校同窓会の一員として、後輩たちを応援してくれることを願っております。そして、本校で培った自主・自律の精神で、よりよい地域づくりに貢献しつつ、力強く、そしてたくましく人生を生き抜いてください。名残は尽きませんが、巣立ちゆく皆さんの御健勝、御多幸と一層の御活躍を心から祈念し、式辞といたします。

令和八年三月一日

愛媛県立川之江高等学校長 松木 義明